ふるさと再発見
～幕末維新と徳地～

奇兵隊の徳地転陣

今回は、徳地にとって幕末の大事件、「奇兵隊」の徳地転陣について話しましょう。

前回書いた下関戦争での大敗は、長州藩を大きく揺るがしました。それは攘(じよう)夷(い)（外国を討つ）の無意味さを知らされたことと支配階級である武士のふがいない戦闘の姿を見せつけられたことでした。そんな中、高杉晋作は当時の身分制にとらわれないまったく新しい戦闘部隊を考えていくのです。それが「奇兵隊」（「諸隊」ともいいました。）です。

しかし、この元治元年（1864年）は、長州藩にとって内に外にと苦境の年でした。

内には外国艦隊に負けて巨額の補償を求められ、外（京都）には池田屋事件や蛤(はまぐり)御(ご)門(もん)の変（御所に発砲した事件）が起こりました。その結果、朝廷は幕府に対して長州を討(う)つよう命じてくるのです。当然ですが、藩内では事件や対応を巡って激しい対立が起こりました。俗論派（保守）、正義派（革新）と呼ばれる権力争いがそれです。やがてその争いは、静かなここ徳地を激しい渦に巻き込んでいきました。椋梨藤太は正義派を厳しく弾圧し、奇兵隊を含む諸隊に解散を命じます。これが「諸隊解散命令」です。「正義派が消える!」周布政之助や家老の清水清太郎は危機感を募らせ、三田尻の警備に着いていた奇兵隊を徳地に転陣させていくのです。この時、諸隊が21ありましたが、奇兵隊と膺懲(ようちよう)隊の2隊（200名～250名）のみが解散命令を蹴って、この年の10月20日に徳地へ転陣して武装配置を決めました。隊士の合い言葉は「徳地の弔(とむら)い合戦」だったといいます。

陣屋割(じんやわり)　堀村　小古祖　深谷　　本陣　正慶院（小古祖）、*第一銃隊　澄月院*（才谷）、*弓隊・第二銃隊　多念寺*（小古祖）、*第三銃隊　金徳寺*（庄方）、*槍隊　妙楽寺*（深谷）、*熕(こう)(=大砲)隊　妙蓮寺*（旭）、*狙撃隊　宝徳寺*（須路）

（ ）内は現在地

小古祖　正慶院　（本陣）

庄方　金徳寺　（第三銃隊）

斜字は奇兵隊日誌。俗論派と幕府軍に対(たい)峙(じ)するため、堀の全域が戦闘体制に入っています。徳地への転陣は、高杉晋作が功山寺で挙兵するわずか2か月前のでき事でした。

（徳地幕末維新歴史放談の会　代表　山田 文雄）